

く、調査客體の一千家族を凡て同一収入の家族に取ることができなかったのも其の一つといへよう。調査の對象とされた無子家族の平均月収は一八七、一子家族は一八八、二子家族は一八八、三子家族は二〇〇、四子及それ以上の多子家族は二一三RMとなつてゐる。同調査の主要數字を掲ぐれば次の如くである。

項目	(總支出に對する百分比)		
	(1) 無子家族	(2) 四子家族	(3) 増減する百分比
飲食費	三・六	四・三	(七) 七
被服及洗濯費	七・七	八・七	(十) 〇
住宅整備費	一・七	三・三	(十) 六
入浴費	二・三	一・五	(十) 二
光熱費	四・二	四・三	(十) 〇
その他	九・一	二・一	(十) 〇
税金	三・二	〇・一	(一) 三
家賃	二・〇	二・五	(一) 五
娯樂費	四・六	三・三	(一) 三
教養費	三・七	二・四	(一) 三
保險金	九・一	八・〇	(一) 一
寄附金	一・四	〇・五	(一) 〇
諸會費	一・八	一・三	(一) 〇
保健費	一・四	一・〇	(一) 〇
交通費	一・三	〇・八	(一) 〇

右表によれば支出増は飲食費、被服費、住宅整備費(増築、子供の寢臺など)に著しいが、其の他の要費中には借金も含まれてゐる。光熱費は實際上も豫期される通りさしたる増加を見せられてゐない。併し之等の支出増も子供數に比例して増大してゐるわけではなく、從

つて多子家族は恐らく安くて且つ榮養價も低い飲食物や簡粗な服装、僅かの入浴等を忍んでゐると考へられる。税金及諸會費(例へばD.A.F.の組合費)の減少はよろこばしい現象だが、之以外の節約部分が問題で家賃の減少は多子家族が小さくて恐らくはまた舊い家に住んでゐることを物語つてゐる。教養費の減少は芝居や音樂會などは勿論、新聞購讀にまでも及んでをり、保險費の減少は多子家族が非強制的な保險(物件及生命保險)に殆んど加入してゐない爲である。交通費の低下は自轉車利用等による所も多いが、また多子家族に對する種々の恩典の所爲もある。

なほ右表による四子家族の節約の總計は一・六%で、其の内税金、諸會費、寄附金等の節約を除いた眞の節約は七・〇%となる。いひ換へれば月収一九七マルクの無子家族が四人の子を持つて同程度に暮してゆくには二〇八・八マルクの月収が必要となるわけだが、調査對象となつた四子(及其れ以上の多子)家族の平均月収は二一三マルクの家族で、若し収入が均等であつたならば節約度は更に一層強化されねばならぬことになる。其の點まで究明し難いところに前述本調査の瑕瑾があるといへよう。

尙、本調査が資料とした原調査一九三七年以後、昨三九年の税制改革は更に人口政策的改善の跡を示してをり、又一昨三八年の家族手當の制度は第三及第四子には月々十マルクを、第五子以上には夫々月々二十マルクを支給することになつてゐる。(Soziale Praxis 1940 2 Heft 所載)

世界最大人口收容力の推定

(埋め草)

- E・G・ラヴェンシュタイン 五、九九四(百萬)
- 『歐洲人の猶ほ入植し得る地域について』王立地理學會講演集 第十二卷 一八九一年
- V・フィルクス 七、八〇〇(百萬)
- 『人口論』一八九八年 二九五頁以降
- K・バロッド 五、六〇〇(百萬)
- 『地球は幾何の人口を養ひ得るか』シュモラー年報 第三十六卷 一九一二年
- H・ロッシュ 七、〇〇〇(百萬)
- 『世界の人口の限界』ヴェルテンブルグ年報 一九二一—二二年
- A・ベング 七、六八九(百萬)
- 『人類地理學の根本問題』プロシア學士院就任講演集 一九二四年
- A・フィッシャー 六、二〇〇(百萬)
- 『人口收容力の問題について』政治地理學雜誌 第二卷 一九二五年